

2024

JAL Scholarship Program Report

2024 JAL スカラシッププログラム報告書

テーマ：「SDGs」～持続可能な未来へ～

オンライン：2024年6月27日（木）～ 7月3日（水）

対面：2024年7月4日（木）～ 7月18日（木）



JAL FOUNDATION
公益財団法人JAL財団



JAPAN AIRLINES

参加者

韓国、北京、大連、上海、広州、天津、香港、フィリピン、台湾、ベトナム、タイ、カンボジア、ラオス、ミャンマー、マレーシア、シンガポール、インドネシア、インド、グアムから選出された海外の学生（海外スカラー生）24名と、日本人学生（東京スカラー生）11名が参加した。

スケジュール

6月27日	木	オンラインプログラム 1 日目 午後：オリエンテーション（スケジュールおよび注意事項の説明、JAL 財団の活動紹介） SDGs や環境問題に関する話題提供 アイスブレイクと「一筆入魂」
6月28日	金	オンラインプログラム 2 日目 午後：講義「地球温暖化の現状やその解決に向けた取り組みについて」 江守正多 氏（東京大学未来ビジョン研究センター教授）
6月29日	土	オンラインプログラム 3 日目 午後：講義「SDGs と生物多様性の課題について」 道家哲平 氏（日本自然保護協会広報会員連携部長、国際自然保護連合日本委員会事務局長）
6月30日	日	休息日
7月1日	月	オンラインプログラム 4 日目 午後：講義「Design for Change の環境アプローチ」 大葉ナナコ 氏（DFC Japan 代表、環境省森里川海アンバサダー、環境省グッドライフアワード実行委員）
7月2日	火	オンラインプログラム 5 日目 午後：2023 スカラー生発表、日本航空（JAL）の環境の取り組み紹介、オンラインプログラムふりかえり
7月3日	水	休息日
7月4日	木	海外スカラー生 来日
7月5日	金	対面プログラム 1 日目 午前：オリエンテーション（JAL 財団挨拶、事務局メンバー紹介、参加の注意事項、日本でのマナー） 午後：チームビルディング
7月6日	土	対面プログラム 2 日目 午前：福岡へ移動 午後：宗像大社の参拝体験と世界遺産「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」を学ぶ
7月7日	日	対面プログラム 3 日目 午前：基調講演「海洋保全と私たちの暮らし～宗像の海再生に向けて」 清野聡子 氏（九州大学大学院 工学研究室 環境社会部門 生態工学研究室准教授） 午後：福岡教育大学の紹介及びキャンパスツアー 福岡教育大学の学生とワークショップ（タイムマシン、2030 年の未来を想像する）
7月8日	月	対面プログラム 4 日目 午前：さつき松原海岸でのビーチクリーン 午後：大島学園の中学生とごみストーリー紙芝居の制作ワークショップ

7月9日	火	対面プログラム5日目 午前：タカミヤ環境ミュージアム（旧：北九州市環境ミュージアム）の視察 午後：シャボン玉石蝸工場の視察 魚町商店街の視察
7月10日	水	対面プログラム6日目 午前：東京へ移動 午後：東京スカラー生11名と合流、JALスカイミュージアムの視察
7月11日	木	対面プログラム7日目 終日：ジブリ美術館の視察 東京スカラー生によるフィールドワーク「東京で出会うSDGs」
7月12日	金	対面プログラム8日目 午前：日本フードエコロジーセンターの視察 午後：さがみこファームの視察
7月13日	土	対面プログラム9日目 終日：樹木・環境ネットワーク協会によるごみ処理施設視察と森林整備活動
7月14日	日	対面プログラム10日目 午前：開発教育協会によるワークショップ「パーム油のはなしー地球にやさしいってなんだろう？」 午後：研修のふりかえり
7月15日	月	対面プログラム11日目 終日：アクションプランの作成（グループ討議・資料作成）
7月16日	火	対面プログラム12日目 午前：アクションプランの作成（グループ討議・資料作成） 午後：ワークショップ「わたしの2030年目標」
7月17日	水	対面プログラム13日目 午前：アクションプラン発表会① 午後：アクションプラン発表会② 「わたしの2030年目標」の発表 修了式・フェアウェルパーティ
7月18日	木	帰国

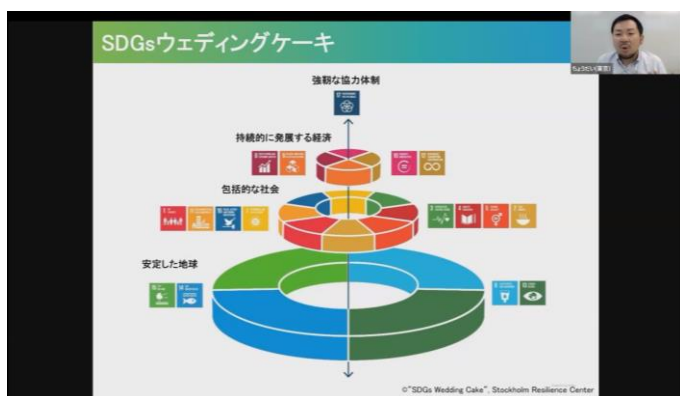
オンラインプログラム

★オリエンテーション

JAL 財団理事長・赤坂祐二による海外スカラー生に向けた挨拶の後、プログラムの趣旨、スケジュール、注意事項について JAL 財団が行う活動について、それぞれ説明が行われた。

★SDGs や環境問題に関する話題提供

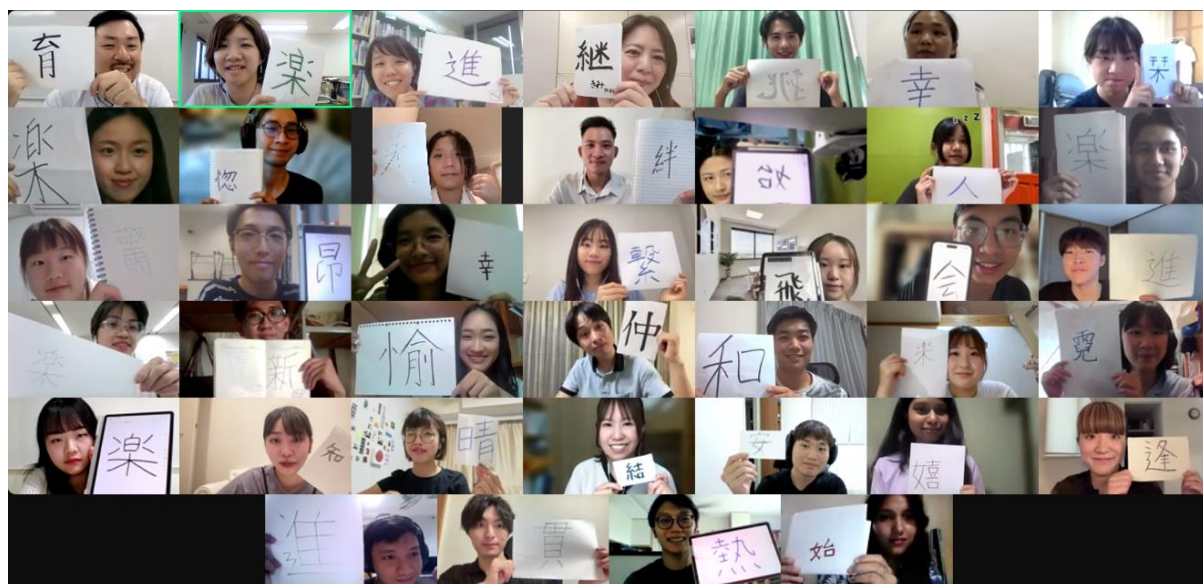
国連が定める「持続可能な開発目標（SDGs : Sustainable Development Goals）」と環境問題に関する基礎情報の講義が行われた。「誰一人取り残さない（leave no one behind）」「変革（Transformation）」がキーワードであり、ここに至るまでの経緯や環境問題解決に向けたムーブメント、2030 年のゴールが我々に残された最後のチャンスであることなどが紹介された。また、SDGs 達成の基盤には、海や陸といった環境に対する問題の解決が不可欠であることから、本プログラムでは環境問題への対策を中心に視察やプログラムが企画されていると伝えられた。



★アイスブレイクとグループワーク

今後の研修をともにする仲間同士で、アイスブレイクを行った。最終日のアクションプラン作りのグループ（ホームグループ）も発表され、グループごとに制限時間内に共通点をいくつ見つけられるかを競った。日本への印象、漫画、趣味、スポーツ、海外旅行の経験などをグループで話し、一番多かったグループは 14 個の共通点を見つけていた。

また、期間中の目標設定を行った。「2030 年にあなたと日本の関係はどうなっていると思うか、どうなっていたいか？」「それを達成するために本研修をどう活かすか？」をそれぞれ個人で考えた後、ホームグループや全体で共有した。さらに、初日のふりかえりとして、今の気持ちを漢字一字で表現する「一筆入魂」を行った。

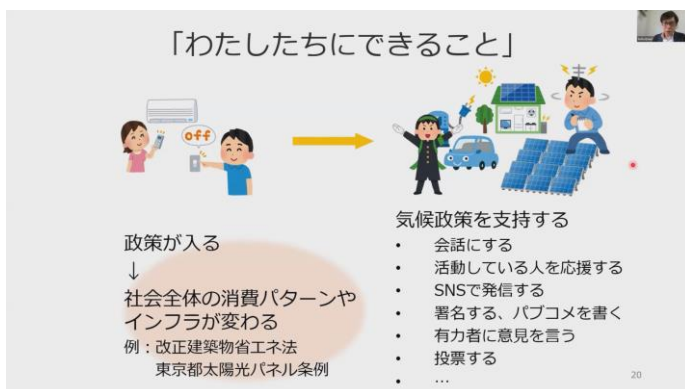
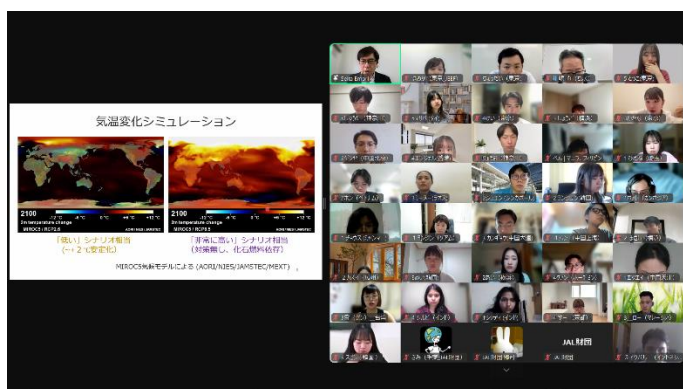


★講義「地球温暖化の現状やその解決に向けた取り組みについて」

講師：江守正多 氏（東京大学未来ビジョン研究センター教授）

講義では、地球温暖化のしくみや、2015 年に採択された国連パリ協定について解説があり、パリ協定で基準とした平均気温上昇の 1.5℃という数値に、現時点ですでに達してしまう日があるという現状が伝えられた。さらに、地球温暖化が進んだ場合の生物や食料、海面上昇などへの影響についても説明がされ、解決のためには社会の“大転換”が必要であることが述べられた。地球温暖化の解決には、化石燃料から再生可能エネルギーにいかに移行するかというエネルギーの切り替えの仕組みづくりが重要であり、システムチェンジを個人としてどのように後押しできるかが私たちにできることである。

講義を受けて海外スカラー生・東京スカラー生からは、自分たちに身近な話題から、紙ストローやごみの分別などの取り組みの日常的な継続の難しさや環境問題へ取り組まなければいけない現状とのジレンマや、牛を題材としてすべて一様に善悪で区別することはできないのではないかといった疑問が寄せられ、今後のプログラムの中で考えていくための要素を多く得ることができた。



★講義「SDGs と生物多様性の課題について」

講師：道家哲平 氏（公益財団法人日本自然保護協会広報会員連携部長、国際自然保護連合日本委員会事務局長）

講義では、SDGs と生物多様性との関連や、生物多様性が失われている世界の現状、またその解決策として実施されている事例紹介などが話された。講義の前には「SDGs の 17 の目標のうち、どの目標が自国で達成度が低いのか」を調べるという事前課題が出され、海外スカラー生・東京スカラー生は調べた内容を Zoom のアンケート機能にて投票した。結果として、「陸の豊かさを守ろう」「海の豊かさを守ろう」といった生物多様性にかかわる目標の達成度が低いことが明らかとなった。また、生物多様性を理解するカギとして「Variability (Vary + Ability)」という用語が紹介され、変異が生じる素地があること、つまり「多様性」が生命の本質であることが述べられた。さらに絶滅危惧種に指定されている二ホンウナギを例に、生物の絶滅危機の要因や自然が失われていく原因には人々の悪意ではなく、自然環境“以外”の公益の追求があることが伝えられ、このような課題に対する解決策として、群馬県みなかみ町「イヌワシ木材」の事例が紹介された。

講義を聞いた感想として海外スカラー生・東京スカラー生からは、仕事や学校といった生活の中で環境保護のアクションに参画することの難しさが語られた。それに対して講師からは、経済活動と環境保護を対立するものとするのではなく、双方が発展することで互いに利益がある相互作用をもつ方法を追求する考え方が重要となることが伝えられた。



★講義「Design for Change の環境アプローチ」

講師：大葉ナナコ 氏（DFC Japan 代表、環境省森里川海アンバサダー、環境省グッドライフアワード実行委員）

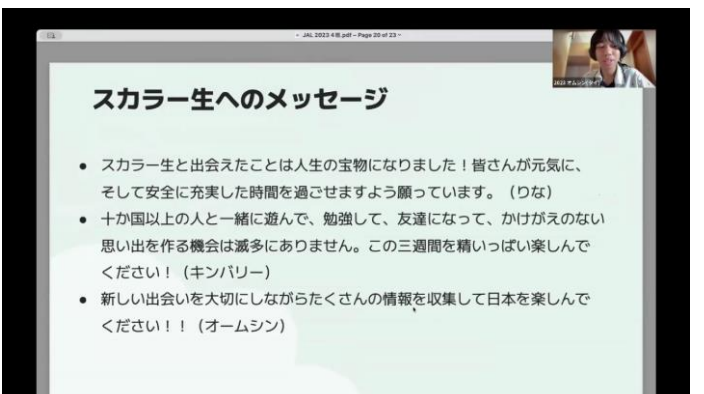
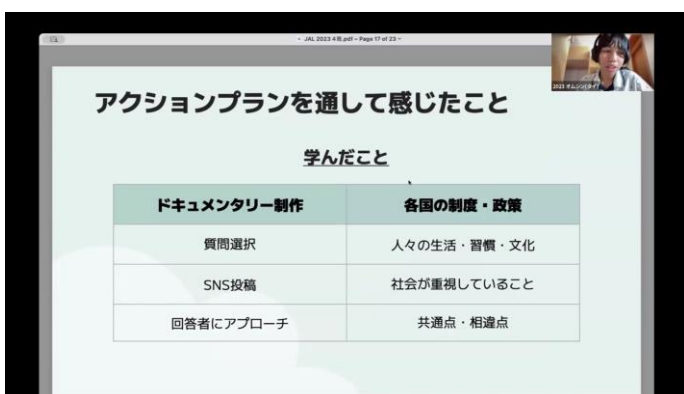
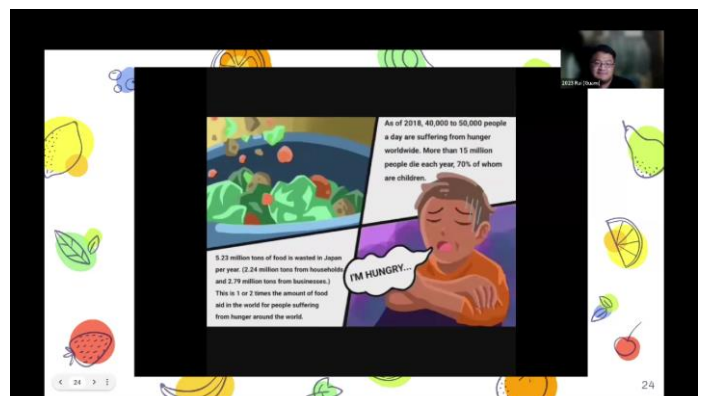
講義では、暮らしの中でできる SDGs の取組やライフスタイルシフトをテーマとし、持続可能な未来のための 4 つの大切な“S”（Simple、Small、Slow、Self love）や、子どもたちの課題解決力を育てる体験学習「Design for Change」など、一人ひとりが取り組むことのできる、環境問題を解決するヒントが紹介された。また、ショートムービー「Re-member／リ・メンバー」の視聴や、暮らしの中でできる取組をキーワードとイラストで表した「パターンランゲージ手法」の説明がされた。

海外スカラー生・東京スカラー生からは、「調査・研究による数値的な説明だけでなく、ビジュアルを用いた非言語の手法を用いることで、人々の感情に訴えかけるインパクトを与える伝え方があると感じた」、「社会単位で取り組むものだけでなく、個人でもできる取り組みがたくさんあることがわかった」といった意見が挙げられた。



★2023 スカラー生発表

2023 スカラー生のうち 2 グループから 5 名が参加し、作成したアクションプランの紹介やスカラシッププログラムの思い出、その経験を今にどう生かしているかなどについて、それぞれ発表があった。発表を聴いて、2024 スカラー生からは、「発表から情熱、労力、成果を目の当たりにして、プログラムの影響の大きさを感ずることができた」、「2023 スカラー生は 1 年たっても交流が続いているから、私たちも交流を長く続けたい」、「言語の壁を超えるアクションプランはこのプログラムならではのと感じた」といった意見が挙がった。



★日本航空（JAL）の環境の取り組み紹介

講師：湯浅浩茂 氏、山中沙綾 氏（日本航空株式会社総務本部 ESG 推進部環境推進グループ）

日本航空（JAL）グループが定める「豊かな地球を次世代へ」の達成に向けた環境方針についての説明や、実施されている環境負荷低減への取り組みの紹介がされた。具体的な取り組みには、機内で使用された紙コップのリサイクルや、廃棄される航空機の部品等をアップサイクルしたグッズの事例があった。これらの取り組みは JAL グループ単体ではなく、様々な企業とのコラボレーションによって実現している。

質疑応答では、企業が環境に配慮しながら事業を推進していく際の疑問が多く挙がった。リサイクルの事例についての質問では「紙コップは品質を保つためにリサイクルができなくなる加工が必要だと聞いたことがあるが、今回の事例ではどのようにリサイクルしたのか」という意見に対し、「品質を保つ加工をしてもリサイクルができる新技術が開発された」との解説があった。また、「環境配慮にかかるコストをどのようにまかなっていくのか」という質問には、「企業が環境配慮を推進するための補助金の活用や、ICP（Internal carbon pricing）といった炭素排出量削減を見える化する考え方がある」との回答がされた。



★オンラインプログラムふりかえり

オンラインプログラム全体を通したふりかえりを行った。海外スカラー生・東京スカラー生からは「プログラム後もしっかりとアクションをする必要があると思った」、「環境のことを勉強したことがなかったため、今後勉強したいと思った」といった感想や、「去年の方々はSNS をうまく使っていたので、今年は自分たちで何か違う手段で伝えたい」、「対面プログラムでも他の国の人の意見を聞きながら自分の考えも出していきたい」などこの後の対面プログラムに向けた意気込みが挙げられた。また、「みんなに会うのが楽しみ」、「初めての日本なので不安とワクワク」など、来日に向けた盛り上がりがそれぞれの心に起きていた。

対面プログラム

★オリエンテーション

24名の海外スカラー生全員が元気に来日し、集合した。オリエンテーションでは JAL 財団常務理事・池田了一の挨拶のあと、海外スカラー生の自己紹介、事務局メンバーの紹介、参加の注意事項、日本でのマナーについて説明があった。本プログラムのために多くの人が協力してくれていることを忘れず、時間を守って学びの姿勢を大事に参加するよう、改めて共有され、対面プログラムのスタートとなった。



★チームビルディング

「これから 2 週間をともに過ごす仲間として、どんなグループになりたいか？そのために自分は何をするか？みんなに何をしてほしいか？」を考える、海外スカラー生同士のアイスブレイクを行った。実施したアクティビティは、人によって感じ方や緊張場面が異なることを知る「C ゾーンアンケート」、カードを使ってなるべくたくさんの人と関わるゲーム、手の甲に載せたカードをキャッチボールのように相手に渡していく協力ゲーム「フライングペーパー」、椅子を二重の円にしてテーマについて 2 人 1 組で話す「コンセントリックサークル」、アクションプラン作りのグループ（ホームグループ）ごとに紙の構造物をつくり、その上に重りを何個載せられるかに挑戦する「紙の建築チャレンジ」など。海外スカラー生一人ひとり、またアクションプランを作成するホームグループ同士が打ち解け、協力する基盤を作ることができた。最後に、翌日の出発と開催中の連絡手段について注意事項が共有された。



★宗像大社の参拝体験と世界遺産『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群』を学ぶ

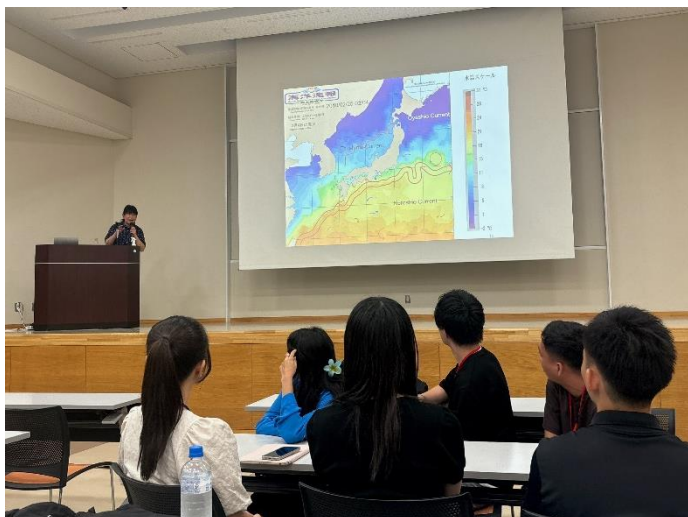
福岡県宗像市へ移動し、宗像大社を訪問した。宗像大社は『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群』として世界遺産に登録され、宗像市の本土、大島、沖ノ島と三女神伝説とともに、朝鮮半島と九州をつなぐ海の安全を願う祭祀の文化が守られてきた。海と密接に生きてきた地域の文化・生活や考え方には、海と人がともに生きるためのヒントが多く隠されている。沖ノ島から出土された国宝が保管されている神宝館の見学や、拝殿に上がって正式な参拝の体験を通して、それらを学んだ。



★基調講演「海洋保全と私たちの暮らし～宗像の海再生に向けて」

講師：清野聡子 氏（九州大学大学院 工学研究室 環境社会部門 生態工学研究室准教授）

講演では、宗像大社の教えである自然への畏敬を日々の生活に取り込み、海の恵みを長きにわたり大切にしてきた“海洋民族”宗像市の暮らしや知恵、そこから現代が抱える海ごみ、漁業の衰退、生態系の変化などの問題への取り組みについて解説がされた。宗像大社沖津宮のある沖ノ島は古来より交易において重要な地であり、それには周辺の地域間にある潮の流れがもたらす海の恵みが関係していた。しかし、現在ではその海流によって海ごみも近隣の国々から運ばれてしまい、漂着物も多いという問題につながっている。海流はアジアのごみを日本海へ運び、日本海からさらに太平洋に向けて海ごみは流されていく。このことから、海には国境がなく、環境問題の解決には一つひとつの国だけでなく、アジア・オセアニア地域同士や世界各国が協力して考えなければならないことが伝えられた。また、SDGs は 2030 年に区切りをつけるが、SDGs の次の目標はすでに検討が進められていることが紹介された。海外スカラー生たちは 2030 年以降を担っていくユース世代であり、その世代が国際会議などでこれからの社会をつくるための意見を出したり、消費者として環境に配慮した商品を選択したりすることで、社会や企業を動かすことができる。



★福岡教育大学の紹介・キャンパスツアー及びワークショップ

福岡教育大学から、大学および福岡県の紹介、SDGs クラブの活動紹介が行われた。海外スカラー生と福岡教育大学の学生が混合で5グループに分かれ、日本の大学の敷地を見学し、図書館に貯蔵されている古い日本の教科書を見せてもらうなど、キャンパスツアーも実施した。

その後、ワークショップを行った。SDGs の最終年が6年後の2030年であることを挙げ、6年前（2018年）に比べて2024年にあるものを考えた。6年という期間は短く感じるが、社会は大きく変化していることを実感した。次に6年後の2030年には、社会や自然環境がどう変化しているかを想像し、「2030年の流行語大賞」と題してグループごとの考えを共有した。6年の時間で社会は変化が可能であることを学ぶとともに、学生同士の交流も深まった。



★さつき松原海岸～大島でのビーチクリーン及び中津宮と遙拝所の参拝

NPO 法人改革プロジェクトの協力を得て、さつき松原海岸でビーチクリーンを行った。前日にビーチクリーンが行われていたこともあり一見きれいにみえた海岸だったが、実際に砂をザルですくってみると細かくなったプラスチックの破片を大量に回収することができた。海流にのまれてもろくなったプラスチックは細かく砕かれてしまい、そうなった後に回収することがいかに困難であるか身をもって感じた。

その後、フェリーで大島へ移動し、宗像大社の三女神の次女が祀られる中津宮を参拝した。昼食は民宿「つわせ」にて大島で採れた魚をいただいた。近年の海水温の上昇によって、この日に食べた魚が数年後にはこの地域では採れなくなる可能性があることを学んだ。

昼食後には午後のワークショップで使用する海ごみの回収のため、「つわせ」前の海岸で再びビーチクリーンを実施。さつき松原海岸とは異なり、ペットボトルやプラスチックタンク、漁業の道具など比較的大きなごみが大量に流れついており、潮の流れによって海岸に流れ着くごみの量や種類が異なることを学んだ。

ビーチクリーンの後は沖ノ島を眺める遙拝所を訪問し、大島学園へと移動した。



★大島学園の中学生とのワークショップ

海外スカラー生と大島学園の混合で 5 グループに分かれ、海岸で拾ったごみがなぜここに流れ着いたのかという背景を想像し、ストーリーを作って紙芝居にするワークショップを行った。はじめはお互いに緊張した面持ちだったが、アイスブレイクのアクティビティや、大島の特産品のゼリーと一緒に食べる間にだんだんと緊張もほぐれ、協働しながらごみのストーリーに想像を膨らませてそれぞれの持つ特技（アイデア、イラスト、演出など）を駆使した個性的な紙芝居が出来上がった。

大島学園の学生と別れた後は、改革プロジェクトが実施する取り組み紹介を聴き、一人ひとりが今日のふりかえりを絵や言葉で表して発表した。



★公害を乗り越えた町の歴史と現在の取り組みを学ぶ

福岡県北九州市の「タカミヤ環境ミュージアム（旧：北九州市環境ミュージアム）」を視察した。北九州市はかつて深刻な公害被害に見舞われていた。しかし、市民が立ち上がり、他の自治体に先立って公害対策の実施や、企業も技術革新に積極的な取り組みを行った。これによって、公害問題を克服した地域である。公害克服の経験で培われた地域社会のパートナーシップは現在のまちづくりや地域環境改善活動に引き継がれ、現在は「環境モデル都市」として市民、企業、研究機関と行政が一体となっている。タカミヤ環境ミュージアムでは、公害克服の歴史と地域社会のパートナーシップ、現在の北九州市で行われているリサイクルや環境の取組についての展示を見学し、これからの在り方を一人一人が考えるきっかけとなった。



続いて訪れたのは昔ながらの無添加石けんを製造する「シャボン玉石けん株式会社」の工場。合成洗剤と石けんの違いについての解説や、石けんが製造されるまでの工程を見学した。無添加石けんは役目を終えると分解されるため環境負荷が小さく、酸化防止剤や着色料なども使用していないため肌にも優しい。当時は無添加に切り替えたところ、売り上げがほとんどなくなった状態で 17 年間赤字が続いたが、現在は価値を理解してくれる人も増えていると話があった。

その後、魚町商店街を訪れた。魚町商店街は 2018 年に SDGs 商店街宣言をし、ホームレス自立支援・障害者自立生活支援などにより第 3 回 SDGs アワードで内閣総理大臣賞を受賞した商店街である。海外スカラー生は実際に商店街を自由に見て回る中で、各商店が取り組む SDGs の要素を体感した。



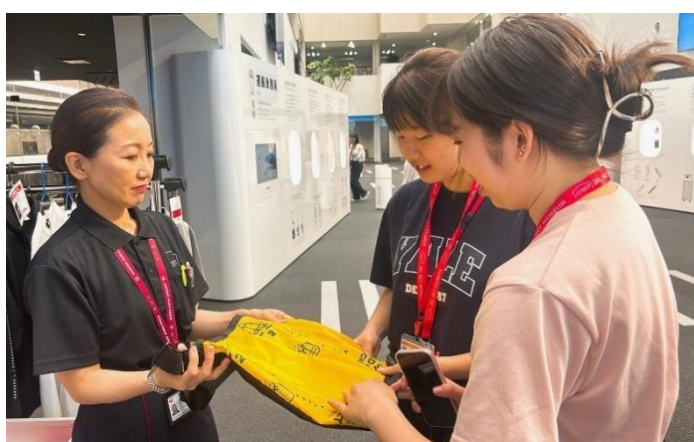
対面プログラム in 東京

★JAL スカイミュージアムの視察

福岡から東京へ移動。東京スカラー生 11 名と合流し、JAL スカイミュージアムを訪問した。

JAL スカイミュージアムでは、JAL の仕事内容の紹介や空港の役割について解説があり、また、飛行機のコックピットや客室の雰囲気を楽しめる模型、未来に向けたプロジェクトなどの展示を見学し、航空の歴史や各職種の仕事、安全運航について学んだ。オンラインプログラムで紹介された航空機の部品のアップサイクルグッズの販売もあった。格納庫では整備中の飛行機を間近で見学し、その迫力と、関わる人たちが熱意を持って細かいところまでしっかりと整備していることを知り、命を預かる仕事の大切さを感じることができた。

夜の懇親会では、海外スカラー生と東京スカラー生同士はもちろん、JAL 財団職員も参加し、お互いに交流を深めた。



★ジブリ美術館の視察と東京スカラー生によるフィールドワーク「東京で出会う SDGs」

アクションプラン作成のホームグループに分かれ、ジブリ美術館の視察とグループごとのフィールドワークを行った。

ジブリ美術館では、日本を代表する文化の一つ「アニメ」を通して、自然と共存して生きてきた日本の暮らしを学んだ。日本の自然を美しく描くジブリ作品からは、自然の荘厳さや厳しさ、公害の問題、里山文化、そこに暮らす人々の暮らしや葛藤などをさまざまなストーリーから読み取ることができる。海外スカラー生・東京スカラー生は自由に美術館を見て回りながら、映画で描かれた背景や解説の展示などを見学した。

「東京で出会う SDGs」では、東京スカラー生が街中で体験できる SDGs の取り組みを事前に調べ、企画したフィールドワークを実施。グループごとに浅草や新宿など、東京の街を案内し、都内にある SDGs に関する施設を訪問したり、環境問題に対する取り組みを体験したりした。

各グループのフィールドワークのテーマは次の通り。

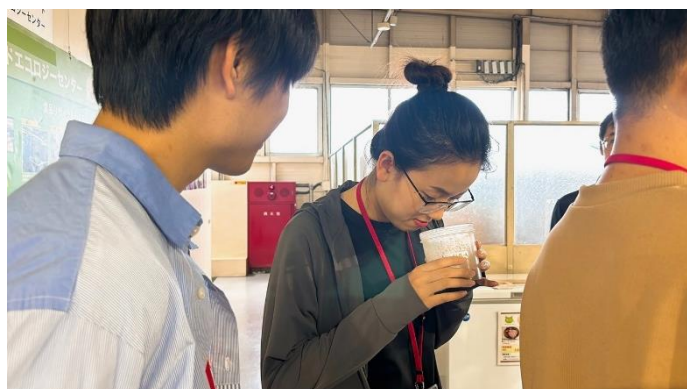
- ホームグループ 1 「ユニークな視点で考える SDGs」
- ホームグループ 2 「東京の街歩きで発見する持続可能な生活スタイル」
- ホームグループ 3 「色んな視点から東京の今と未来を考えよう」
- ホームグループ 4 「東京旅から学ぶ身近な SDGs」
- ホームグループ 5 「日本の技術を見て・聞いて・食べて・触って・感じて・持続可能な未来を考える」



★日本フードエコロジーセンターの視察

株式会社日本フードエコロジーセンターは、フード・リサイクル分野のパイオニアとして、処理過程で使うエネルギーにまで配慮し、できあがった再生資源を製品化、ブランド化し、広く流通させるところまでをトータルに支えるサービスを展開している。その取り組みが評価され、2018 年にはジャパン SDGs アワード内閣総理大臣賞を受賞した。

本センターの案内で、食品ロス問題やその解決に向けた取り組みの紹介と、飼料化の工程を見学した。世界では生産量の約 1/3 にあたる年間 13 億 t もの大量の食品を廃棄し、日本国内だけでも年間約 2,000 万 t が廃棄物として処理され、その多くが私たちの税金を使って焼却炉で燃やされている。本センターでは余った食品をリキッド発酵飼料化し、その飼料を食べて育った豚をブランド化することで価値を生み、また消費者へ届ける地域社会の循環を構築している。さらに飼料化できない食品を用いたバイオガス発電も行っており、発電施設についても紹介があった。海外スカラー生・東京スカラー生はビジネスモデルとして構築された取り組みに関心し、社員へ積極的に質問したり、飼料のにおいをかいでみたりしながら、話に耳を傾けていた。



★さがみこファームの視察

株式会社さがみこファームは相模原市山間部の耕作放棄地を再生し、農産物と自然エネルギーを同時に生産する「ソーラーシェアリング」を相模原で初めて実現した農園である。36 種類 1,100 本のブルーベリーの摘み取りが楽しめる体験型農園『さがみこベリーガーデン（SBG）』を 2023 年 6 月にオープンし、収穫体験や農園スタディツアーなど、個人・団体向けに様々な体験プログラムを提供している。この日は雨の降る悪天候であったが、農園に設置されたソーラーパネルの見学や、ソーラーシェアリング実現までの道のりについての解説を受けたり、6 種類のブルーベリーの食べ比べをしたりしてさがみこファームの様々な取り組みを見学した。



★樹木・環境ネットワーク協会によるごみ処理施設視察と森林整備活動

NPO 法人樹木・環境ネットワーク協会の案内で、午前中央防波堤埋立処分場・廃棄物処理施設を、午後海の森公園を訪問した。

中央防波堤埋立処分場・廃棄物処理施設では、東京都 23 区内で出たごみがどのように処分されているのかを見学した。はじめに施設内の大型スクリーンにて映像を視聴し、家庭のごみが埋立地に処分されるまでの流れや、粗大ごみを施設内で解体処理する方法など、ごみの種類によって様々な処分方法があることを学んだ。また、埋立地は近い将来にいっぱいになってしまうことがわかっており、そもそもごみの排出量を減らすことが重要であるということが解説された。その後、バスに乗って埋立地を見学し、高台ではバスを降りて広大な埋立地を眺めた。海外スカラー生・東京スカラー生からは、「処分場がもうほとんど残っていないことに危機感を覚えた」、「自分たちが出したゴミは根本的には処分されておらず、長年そのまま埋められていることに気づかされた」、「自分の国には日本のような分別や処理施設がない。自分の国が持続可能な未来にたどり着くにはまだまだだと思ったが、自分をはじめ、少しずつ現況を変えれば、きっと美しい未来を作れる」といった感想が挙げられた。

午後には、埋め立てが完了した土地を整備してできた森、海の森公園にて森林の育樹活動を行った。アクションプラン作成のホームグループに分かれ、ボランティアの方々からレクチャーを受けながら、生い茂った木々の枝をノコギリで切ったり、下草をカマで刈ったり、木にからまったツタを取り除いたり、グループで協力して取り組んだ。海外スカラー生・東京スカラー生からは、「自然は何もしないのが 1 番だと思っていたが、人間の整備がより良い自然のために必要不可欠なことを実感した」、「1 週間もしたら雑草が 30-40 センチ伸びると知って、植物に対する興味も深まった」といった感想があった。



★開発教育協会によるワークショップ「パーム油のはなしー地球にやさしいってなんだろう？」

NPO 法人開発教育協会の協力のもと、パーム油をテーマに持続可能な社会について考えるワークショップを行った。

ポテトチップス、チョコレート、カップラーメン、アイスクリームなどの原料になっているパーム油を通して、生産国で起こっている問題を知り、大量消費・大量生産のライフスタイル、グローバリゼーション、プランテーション開発、先住民族、熱帯雨林、児童労働など、その問題の構造に関わるさまざまなテーマについて考えた。

活動中はアクションプラン作成のホームグループに分かれ、パーム油の生産から収穫までの流れに沿って複数の写真を並び替えるアクティビティや、プランテーション開発に関わるステークホルダーになりきって開発会議を行うロールプレイなどを実施。ロールプレイ

の役どころには開発の舞台となるマレーシアの人々や、そこに関わる日本企業の担当者など、実際の状況を再現したステークホルダーが設定されており、様々な国や地域から集った仲間で行う本プログラムだからこそ、より実感を伴って話し合いを進めることができた。

海外スカラー生・東京スカラー生からは、「声をあげることももちろん大切だが、小さな声に耳を傾けることも重要であると気づいた」、「社会の基盤には自然があり、個人の利益だけを優先するのではなくて経済発展と自然保護のバランスをとることが必要だ」といった意見が挙がった。



★研修のふりかえり

オンラインプログラムと対面プログラム（福岡・東京）の行程が終了し、まとめの期間に入る。

オンラインプログラムの最後で行った「一筆入魂」とプログラムの行程が示され、約 3 週間の行程があつという間に過ぎた驚きを感じるとともに、様々な体験の一つひとつを思い返した。その後、個人ワークで印象に残った SDGs に関連するキーワードや思い出を 4 つの言葉にまとめ、ホームグループでプログラムの感想や気づいたこと、学んだことをシェアした。さらにグループを移動して別グループのメンバーとも感想や意見を共有して意見交換を行った。

ふりかえりの最後には、全員でひとつの大きな円をつくり、ふりかえりを経て感じる今の想いを語り合った。改めてプログラムへの意気込みや覚悟を語らう時間を過ごし、気持ちを新たに次の日からのアクションプラン作成に臨む準備ができた。



★アクションプランの作成

前日のふりかえりで出た意見や、オンラインプログラムでのアイデア出しをもとに、対面プログラムでの経験等を加えて、ホームグループでアクションプランの作成に取り組んだ。1 日目の話し合いを終えた夜には、会議室の使用時間を過ぎても共有スペースや個人の部屋などで自主的に集まり、遅い時間までプランの作成を続けるグループもあり、それぞれのグループの個性が光る、メンバーの得意を活かしたプランが練られた。



★ワークショップ「わたしの 2030 年目標」

グループでの行動目標であるアクションプランの作成に続き、海外スカラー生がそれぞれ自分の地域へ帰ったあとに、各自でできること、やりたいことを SDGs の目標である 2030 年に向けて 6 ヶ年目標を立てた。「6 年後（2030 年）に、どんな自分になりたいか？」という問いが出され、各自がそれをゴールとして、必要なスキルや経験、人脈などの要素を書き出し、半年後、1 年後、3 年後、6 年後にそれぞれ何を達成するか目標を立てた。数人のグループで共有した後、全員の計画を横に並べながら、自分が目標に向けて取り組んでいるとき、隣の海外スカラー生・東京スカラー生が同じように目標に向けて何をしているか想像した。具体的なイメージを言語化するのに苦戦し時間がかかった人や、みんなに自分が抱く目標を発表することに緊張した人もいたが、最後には全員がそれぞれの「わたしの 2030 年目標」を作成することができた。

最後に、「わたしの 2030 年目標」を漢字 1 字で表現。明日の発表会で紹介する準備を整えた。



★海外スカラー生・東京スカラー生によるアクションプラン発表

JAL スカラシッププログラムの集大成として、全行程を終えた海外スカラー生・東京スカラー生による発表会が行われた。発表会にはプログラムに協力いただいた講師の方や 2023 スカラー生にも一部参加いただき、随所でコメントをいただいた。

ホームグループでの話し合いでは、本プログラムが終了してから半年間で起こせるアクションプランを考えた。アクションプランの発表会は、1 グループ 25 分（準備等含む）で進行し、午前 3 グループ、午後 2 グループが発表。それぞれ、夜遅くまでプランの練り直しや演出、発表練習に費やして挑んだ発表会となった。

発表順及びホームグループ（チーム名）とアクションプランの概要は下記の通り。

- ホームグループ 4（GPAP）…GPAP=GOMI PROBLEM ACTION PLAN 動画の作成と SNS 発信
- ホームグループ 1（チームワンワン）…JAL スカラシッププログラム歴代参加者のコミュニティ構築のための同窓会開催
- ホームグループ 2（YTS）…ファストファッションについてのインタビュー・SNS・ポスターによる啓発活動
- ホームグループ 3（パパと 6 人の子供達）…プラスチックごみ削減のための 1 週間分のチャレンジ表アプリの開発
- ホームグループ 5（冷やしご飯）…ごみ処理を学ぶオンラインゲームの開発



★海外スカラー生・東京スカラー生による「わたしの 2030 年目標」の発表

ホームグループによるアクションプランの発表に続き、一人ひとりが立てた 2030 年までの目標を示した漢字 1 字を発表した。2030 年目標や将来の自分の夢、プログラムを通して抱いた志などを、様々な国と地域から集まった次世代を担う若者たち一人ひとりが真剣な眼差しで語った。本プログラムでの経験が、夢の実現に向けた貴重な一歩となり、プログラム終了後もそれぞれが歩み続けていくことを願ってやまない。





★修了式

発表会後には修了式が行われた。海外スカラー生・東京スカラー生たちは JAL 財団常務理事・池田より一人ひとり修了証書を手渡された後、記念撮影を行った。



★フェアウェルパーティー

フェアウェルパーティーでは食事を共にしながら、最後の時間を共に過ごした。東京スカラー生の企画したビンゴゲームや、東京スカラー生から海外スカラー生へ、グループごとにメッセージが渡された。その後みんなで円になって、プログラムの思い出や一緒に時間を過ごした仲間たちへの想いを語り合った。限られた時間の中で、最後の最後まで別れを惜しみつつ、必ずまた再会することを誓いあい、パーティーはお開きとなった。

海外スカラー生 24 名、東京スカラー生 11 名がそれぞれの国や地域に帰り、今回のプログラムで学んだ経験を活かしてどんなアクションを起こし、さらなる成長を見せてくれるのか。プログラムは終了するが、今後の活躍が非常に楽しみだ。



おわりに

2024 JAL スカラシッププログラム実施においては、各地で関係の皆さまの多大なご支援を賜りました。「SDGs」に関する学び、日本の文化等について、最高の舞台をご準備いただき、海外スカラー生・東京スカラー生たちを暖かく迎え入れ、細やかに対応いただきましたことに心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

主 催： 公益財団法人 JAL 財団

協 力： 公益社団法人日本環境教育フォーラム

後 援： 外務省、環境省、国土交通省、文部科学省

協 賛： 日本航空株式会社



2024 JAL スカラシッププログラムのスカラー生の皆さん、本当にお疲れ様でした。
また会いましょう！